

◆ かつば民話シリーズ⑩ ◆

# 名工甚五郎と 河童堂

めいこう じんごろう と かつばどう



作:近藤せいけん



相模のかっぱ村「三流」の名工 甚五郎、相模川の上流で村人から「真珠玉」と交換してきたヒノキの名木、じっと見つめ、あれこれ思案していた。

「この木は何になりたいのか？このおれに何を彫って欲しいのか？」

名工 甚五郎は目をつぶり、雑念（ざつねん）をはらった。

「ふう〜っ」と心に浮かんだ。「そうだ、かっぱ村の村長、太郎河童を彫ろう」「この村に招いてくれた、太郎河童を彫りあげよう。よし決めた！」

甚五郎は一挙に荒彫りから入り、太郎河童の全体像を彫りあげた。その彫りあげる速さ、力強よさ、正確さ、「一木造り」さすが名人芸である。

甚五郎のかっぱ小屋で、一心ふらんに彫りつづける。何日も何日も、彫り続ける。寝食を忘れ、ただ、ただ、彫りつづける。

「やっと、できた。どうにか気にいったものができた。ありがたい、木に魂（たましい）がやどった」

そっと甚五郎は木彫りの河童を立ちあげる。そして、じっとながめ、相模川の聖水を桶にくみ、出来上がったかっぱの頭から水を流し喜びの呪文（じゅもん）を唱える。「相模川の聖水よ、願わくば力を与えたまえ！喜びと、平安、慈悲の木像となりえんことを、カッパ、カッパ！」

そして出来上がった木像をもって、「三流（さんりゅう）」の村長の太郎河童の家に見せに行った。

「村長、村長！ 甚五郎じゃ〜」と大きな声で村長の太郎河童に呼びかけた。

「お〜おい〜どなた様じゃ？」

「わしじゃ〜 甚五郎じゃ」

「お、おう、ああ〜何と大きな、立派な河童像だこと！」

「村長！ おぬしの像を彫った」

「え、え〜わしの像とな・・・」

村長はまじまじと、かっぱの像をみつめた。

「何と、生きていようじゃ。これがわしか…。魂が感じられる」

そこえ噂を聞いて、村の衆が集まって来た。

「何と！ 本当に生きていようじゃ・・・」

「村長にうり二つじゃ」

「何と立派だこと！」

村長の太郎河童が自分に言い聞かせるように口を開いた。

「この家に飾るには、あまりにもったいない。こんな「魂」のはいった立派なかっぱ像、どうしようか？ そうだ、堂を建て、そこに安置しよう」

そこで、皆の衆に話かけた。

「皆の衆、この立派なかっぱの木像を安置する堂を建てたいと思うがどうだろう」

大工の足助「いいね〜いいね〜やろうじゃんか」

川漁の担当 い吉「皆で力を合わせ、ぱっと、やろうじゃんか」

海漁の担当 う吉「めでたい、めでたい、やろう！」

織物の担当 き絵「いいお話、ぜひ仲間に入れてくだしゃんせ」

という訳で、かっぱ村の衆、皆で堂を作ることになりました。

そこでどこに堂を建てるか、太郎村長は考えた。

ふと、甚五郎の話を思いだした。木の切出しに力を貸してくれた、人間界の村人の話が頭に浮かんだ。村人も甚五郎の木彫りを一体欲しいといていた。

「そうだ。河童界と人間界の境にかっぱ堂を建てよう」

「わが河童族と人間界の融和ができる場所としよう」

早速、太郎村長は村の衆に集ってもらい、その話をした。

村の衆は皆、賛成をした。

そしてかっぱ堂の建築が始まった。村の衆、総でのにぎやかな作業である。皆、生き生きと働いた。

甚五郎はさらに、堂の欄間（らんま）にかける木彫りの彫りに熱中した。数ヵ月後、堂は完成した。

村の衆総で完成を祝った。それは、それは、見事なお堂である。そして中央に安置された「太郎河童の像」はまるで生きているようなすばらしい像である。欄間に飾られた彫りものに皆の目が向けられた。

「ほお～ 鮎が滝を登っている、いま跳ねているようだ」

「かっぱもすばらしいが、この滝上りの鮎も見事、見事！」

甚五郎は皆の衆の賞賛（しょうさん）の中にいたが、ただ、木彫りをじっと見つめるのみであった。

人間界と河童界の境界に建つかっぱ堂、人間界からは見えないまぼろしの堂であった。ただ、人間でも、約束を守り、正直者、心やさしき者、善人には、見える境界のかっぱ堂である。

(終わり)